

置いてけぼりのクエスチョニング

弁財行

【登場人物表】

市村忍（40）（18）  
市村忍（40）（18）  
市村忍の友人

市村明子（42）（20）  
市村明子の娘。忍の姉。  
忍の母（45）  
忍の母（45）

飯島大輔（75）  
飯島大輔の父  
飯島節子（73）  
飯島節子の母

山本恵介（45）

坂井翔子（40）  
坂井翔子の母  
下山大輝（29）  
下山大輝の母  
澤下晃（35）  
澤下晃の母  
千葉知恵（45）  
千葉知恵の母  
天野郁美（50）  
天野郁美の母

コンプライアンス部門担当者

OPP  
OPP  
OPP

若者

新人

新人

購買員

近所の住民  
近所の住民

○（回想）22年前・高校・正門

T・22年前

卒業式後。

満開の桜。青空。

賑わう卒業生や保護者達。

○（回想）22年前・同・2階教室

市村忍（18）、窓枠に肘をつき、外を眺める。

飯島恭介（18）、忍に近付く。

恭介「今日くらい履いてきたらよかったのに。スラックスの制服」

忍「……誰も履いてないし」

恭介「折角バイトして買ったのに。1回も履かないまま終わっちゃったじゃん」

忍「いいの」

恭介、溜息を吐く。

恭介「アンタってさ、思い切りいいのにいざとなると怖がるよね」

忍「……（俯いて）うるさいな」

恭介、忍の頭を撫でる。

恭介「わかるけどさ」

忍「恭介は東京行くんでしょ。そうしたら、

女の恰好するの？」

恭介「するよ」

忍「（窺うように）……怖くない？」

恭介「全然。だって、東京だよ？ テレビと

か、いろんな恰好した人が当たり前に歩いてるじゃん。こんな田舎と違ってさ」

忍「そっか……」

恭介「忍は今のバイトそのまま続けるの？」

忍「うん。でも、正社員の仕事見つけなさいって言われてる」

恭介「東京きたら？ そうしたら仕事だっていっぱいあるし、好きな恰好もいっぱいできよ」

忍「……（首を振って）そんな勇氣ない」

恭介、肩を竦める。

恭介「勇氣ないってわけじゃないと思うけど

ね。バイトしてスラックスだって買ったじやん」

忍「うん……」

恭介「忍はさ、多分、勇気がないんじゃないかと」

恭介、忍の頭に手を置く。

忍、恭介を見上げる。

恭介「まだその時じゃないんだよ」

恭介、視線を空に向ける。

忍、つられて空を見る。

○タイトル

『置いてけぼりのクエスチョニング』

T・「クエスチョニング」とは、英語で「Questioning」と表示し、性自認と性的指向について定まっていない人や、あえて決めていない人のこと。

○現在・地方都市・外観

古い低層ビルが建ち並ぶ。

歩道をスーツ姿の人々が行き交う。

踏切の音や車の音が響く。

○コールセンター・執務室・管理者席

顧客対応中のオペレーター達。（以下、OPと表記）

忍（40）、パソコンに向かい仕事を  
する。パンツスーツ姿。

山本恵介（45）、忍に近づく。

山本「市村さん、これ、遅くなっただけど」

山本「青いネットクストラップを渡す。

忍「ありがとうございます」

忍、橙のネットクストラップを外し、付  
け替える。

下山大輝（29）、向かいの机から身  
を乗り出す。

下山「え、市村さんリーダーからSVに昇格  
したんですか」

山本「(きよとんとして)言っ  
け。今月から市村さんはSVに昇格だよ」  
下山「まじか!市村さんおめでとうござい  
ます!」

忍「(微笑んで)ありがとう」

○同・同・端の席

様子を伺うOP達。

OP1「え、何。なんでストラップの色が変  
わるの?」

OP2「役職が変わると色が変わるのよ。私  
達OPは黄色で、リーダーは橙。SVは青」

OP3「じゃあ市村さん出世したってこと?」  
OP2「そ。かっこいいよね」

天野郁美(50)、顔を歪める。  
郁美「同期なのに。なんかずるくない?」

千葉知恵(45)「あたし達だって頑張っ  
てるのに。(大きな声で)あゝあ、やる気無  
くす」

忍「(淡々と)千葉さん、電話中の人がいま  
す。私語謹んでください」

知恵「(怯んで)え、: : :はい」

OP1「(小声で)嫉妬やば」  
OP2「(小声で)そもそもやる気ある時あ  
った?あたし見たことないけど」

知恵、顔を歪めて俯く。  
郁美、周囲のOP達を睨む。

○同・同・管理者席

忍、着席する。

山本「(苦笑して)女同士の争いってやつ?  
忍「(きよとんとして)なんか言いました?」

山本「ははっ、そうはならないか。ま、わか  
ってたけどね。市村さんそういうの疎いか  
ら」

忍、首を傾げる。

下山、嫌そうに知恵達を見つめる。

下

○同・階段（夕）

階段を降りる下山と忍。

下山「（イライラしながら）ずるいって！意味わかんねえ！」

忍「（苦笑して）そんな言ってたんだ」

下山「市村さんと自分がそもそも同じレベルでいると思ってたことが驚きですよ。勤怠も覚えも悪いし、未だに新人みたいなきミスやらかしてばっかの万年OPのくせに」

忍「まあ、同期だから。面白くないんじゃない？」

下山「じゃあ自分だって努力して仕事覚えればいいだけの話じゃないっすか。自分はお世するつもりないから適当に仕事してる癖に。そういう女ほど自分より上に行く奴を目の敵にしますよね」

忍「こら、ジェンダー差別だよ」

○同・地下喫煙室（夕）

紙煙草を啜える下山と忍。

他に人はいない。

下山「市村さんってああいう女同士の争いに巻き込まれたくないから、かつこいい系の服着てたりしますか？」

忍「忍、きよとんとして自分の服装を見る。」

忍「：普通じゃない？」

下山「結構他の人ってワンピースとかスカートとか多いじゃないですか。ヒラヒラしたやつ。だからなんか混ざらないんですよね。安心できるというか」

忍「そんなんじゃないよ。壊滅的にスカートが似合わないだけ」

下山「ええ、そっすか？」

忍「マジで。ワンピースとか来たたら魔法使いっぽくなる」

下山「魔法使い！」

下山、忍、笑い合う。

○路上・バス停（夕）

行き交う車。  
並んでバスを待つ人々。  
忍、列に並びぼんやりと道路を見る。  
大型バイクが通り過ぎる。

○（回想）2年前・同・同（夕）

大型バイクが通り過ぎる。

忍、一歩前に出てバイクを目で追う。

恭介「（笑って）アンタ、顔だけ車に轢かれ  
るんじゃない？」

忍、はっとして体を元に戻す。

恭介「かっこいいじゃん。アンタああいうの  
似合いそう」

忍、バイクが走り去った方角を見つめ  
たまま。

忍「いつか欲しいなあ」

恭介「（揶揄うように）とか言いつつ無理だ  
って思ってたんでしょ」

忍「……うん」

恭介「（呆れて）無理だって思わなければ無  
理じゃないよ。似合うと思う。バイクも、  
男らしい恰好も。こないだ欲しいって言っ  
てたごっついボディピアスも。忍は絶対に  
似合うよ」

恭介、忍の頭をぽんぽんと叩く。

忍「……別に男になりたいってわけじゃ、な  
いんだよね」

恭介「（きよんとして）違うの？」

忍「ただ、好きだなんて思うだけ。ああいう  
の欲しいなあって。でも、男になりたいとか  
は特に……」

恭介「ふうん、じゃあさ、バイクとか、ボデ  
イピアスとか、カッコいいTシャツ着て、  
どっちに見られたい？」

忍「どっちって」

恭介「男か女か」

忍「（悩んで辿々しく）どっちにも別に、見  
られたくない、かな。ただ、かっこいいも  
の着て、かっこいい人になりたい」  
恭介「（考えて）どっちにも見られたくない、

か。じゃあ男と女どっちが好き？」

忍「どっちもあんまり」

恭介「ふくん。なんか忍らしいね」

忍「（不思議そうに）……子供なんじゃなくて？」

恭介「うん。てか何でそれで子供なの？」

忍「お姉ちゃんとか、そう言うから」

恭介「（遮るように）くだらな。ほっときなよ。……あ、バス来た」

忍、恭介と同じ方向を見る。

バスが目の前に停まる。

恭介、忍、バスに乗り込む。

長と一緒だった知ってた？」

忍「げ、そうだったっけ？」

バスのドアが閉まる。

○現在・同・同（夕）

目の前に停車するバス。

忍、ハツとする。

背後から若者に押される。

若者「どけよ、ババア」

バスに乗り込んでいく人々。

タイミングを失う忍。

バスのドアが閉まる。

窓にくたびれた自分の姿が映る。

俯く忍。

発車するバス。

忍、溜息を吐いて去る。

忍M「あの時、恭介の言う通りやろうと思え

ばできた。服装も、バイクも、ボディピア

スも。もつともつと自分の好きなように。

……でも結局は何もしなかった。勇気がな

かった。そうやって周りに合わせて40に

なつた。なんにもなれず、中途半端なまま

で」

○コールセンター・執務室・管理者席（朝）

山本「忍、山本の席の前に立つ。」

山本「来月、新人入社があるのは聞いてるよ

ね？ 研修担当任せたいんだけどどうかな」

忍 「承知しました」

山本 「今回コール経験者が多いから、未経験とスキル差があんまり開かないように注意して。ヘルプにはリーダー抜いてもいいけど誰にする？」

忍 「そうですね……」

忍、振り向いて執務室を見渡す。

下山、伸びあがって一生懸命忍を見る。

忍 「（笑って）……じゃあ、下山さんで」

下山、ガッツポーズする。

翔子 「ストップ！ やめて！」

忍、山本、振り返る。

翔子、知恵の手を掴み止めている。

知恵、呆然としている。

翔子 「なんで一人で顧客にメール送信してるの！？ 必ずWチェックして送信してって言ってるよね！ しかも宛先間違えてる！」

執務室内、ざわつく。

OPP1 「（小声で）え、誤送信？」

OPP2 「（小声で）嘘でしょ、情報漏洩？」

忍 「送信キャンセルは？」

翔子、力なく首を振る。

翔子 「無理です。タイムオーバーしてます」

山本、忍の背後で溜息を吐く。

忍 「千葉さん、ちよつと席移動しましょうか。状況の確認をしたいので。坂井さんは送信履歴調べて」

翔子 「はい……」

下山 「手伝いますよ坂井さん」

知恵、立ち上がる。

知恵 「（ムツとして）なんでそんなに怒るんですか！？ ちよつと間違っただけじゃないですか！」

忍 「（冷静に）ちよつと間違えて顧客情報漏洩することがないように送信前に管理者がWチェックをする。それがメール送信の理由です。そのWチェックを省いた理由を

教えてもらいたいです。クライアントにも報告する必要がありませんので」  
知恵「ちよつとうっかりしただけじゃない：  
。なんでそんなに怒るの？」  
郁美「ひどくないですか、そんな怒らなくても：  
。私達のこと嫌いなんですか」  
翔子・下山「は？」  
忍「（眉を顰めて）：  
私達はクライアント様からいただいた仕事を為にここにいます。誰が好きだから、誰が嫌いだから、という理由で不必要に誰かを非難することはありません。ちなみに天野さんはメール送信時にWチェックは通してますね？」  
郁美「（都合悪そうに）：  
通してます」  
翔子「（小声で）嘘付け」  
下山「（小声で）常習犯じゃないっすか」  
忍「（咳払いして翔子と下山を背に隠す。の確認させてください。行きましよう」  
忍、その場を離れる。  
知恵、渋々と忍の後に続く。

○同・地下喫煙室（夜）

翔子「お疲れ様です」  
下山「市村さん、お疲れ様です」  
翔子「報告終わりました？」  
忍「（煙草を啣える。）」  
忍「（溜息を吐きながら）なんとかね。顛末書は明日までいいって」  
翔子「本当にお疲れ様です」  
下山「てか、発生原因なんて書くんですか？うっかり？」  
忍「（力無く）書けるわけないでしょうが：  
」  
翔子「というか、意味わかんない。ちよつと間違っただけとか、挙句の果てには嫌いなんですか  
だけとか。挙句の果てには嫌いなんですか

っ。ミスをしたから言ってるじゃないで  
 すか。嫌いって何？　なんでそういう思考  
 回路になるんだか」  
 下山「絶対自分達が悪いなんて思っ  
 てない。あの2人、俺が入社した時  
 からずつとあんな調子じゃないっ  
 ぽか」  
 翔子「普通さ、ミスしたら今度  
 はしないようにして気をつけるよ  
 ね。給料分働こうって思うでしょ。  
 なのにあの2人ときたら大して  
 仕事もできない、勤怠も悪い、  
 挙句同じうなミスばかり！　周  
 りの足引っ張ってるのを恥ずか  
 しいとか思わないの！？」  
 忍「（淡々と）まあ、普通  
 って人によって違うから」  
 下山、翔子、忍を見る。  
 忍「仕事に対する考え方がね。  
 給料もらってるんだからミスし  
 ないように一生懸命仕事来れば  
 給料を貰えるわけだから、仕事  
 を全部覚える必要はない、ミス  
 しようが何しようがその日一日  
 をやり過ごせばいいって考える  
 人もいるんだよ」  
 下山、翔子「（嫌そうに）いら  
 ねえ」  
 忍「こら」  
 下山「市村さんって悟り開いて  
 ますか？」  
 翔子「（笑う）悟り！」  
 下山「市村さんって俺の師匠か  
 と思ってたんですけど、実は師匠  
 じゃなくて和尚だったんです  
 ね」  
 忍「（苦笑して）おい！」  
 翔子「（笑う）それが師匠に  
 対する言葉か！」  
 忍、翔子、下山、声を上げて  
 笑う。  
 × × ×  
 ドアが開く。  
 澤下晃（35）、入室する。  
 澤下「お疲れ様です」  
 忍・翔子・下山「お疲れ様  
 です」  
 下山、翔子、アイコンタクト  
 する。  
 忍、2本目に火を点ける。  
 澤下、忍に近付く。

澤下「そいえば市村さんSVになったんですよね。おめでとうございます」

忍「ありがとうございます」

澤下「女性で管理職って大変じゃないですか？ 本当は俺がなるのが妥当だと思いませんか？ でも俺が女性管理職って作っておいた方が社会的にも受けがいいんです。今色々うるさいです。ジェンダーがどうか」

翔子、下山、ムツとする。

忍「無表情で」そうだね」

澤下「キツイなら俺からグルーブマネージャーに言いましょうか？ 俺はほら、VBAとか結構使えるから市村さんよりいい待遇で入社してるじゃないですか。割と意見とか通る方なんで」

澤下、ニヤニヤと忍を見る。

忍「（穏やかに笑って）：：：そう。でも仕事

だからキツイともなんとも思わないかな。

じゃあ、お疲れ様」

忍、煙草を灰皿に捨てて退室する。

翔子、下山、忍に続いて退室する。

澤下、顔を歪めて3人を見つめる。

○同・階段（夜）

階段を上る忍、下山、翔子。

忍「はあ：：。年々階段がしんどくなるね。年は取りたくない」

下山「いや、それ年のせいじゃないっすよ」

翔子「前から思ってたんですけど、市村さん

ってああいう『構ってちゃん』に執着され

ますよね」

下山「ああ、千葉とか天野とか澤下とか

忍「（疲れた顔で）やめて：：」

下山「最近、自分に変な自信持ち過ぎてる割

に成長できないクソみたいな奴多くないっ

すか」

忍「癖が強いね、うちの会社の連中は」

下山「市村さんが平然としてるだけで割と昔

からサフアリパークですよここは」

翔子「言えてる〜」  
楽しそうに笑う忍、下山、翔子。

○忍のアパート（夜）

ベッドに寝そべりスマホを見る忍。  
動画サイト。性別不明だが美しい人々の映像が流れる。  
次々とスワイプする。ライダーズジャケットを着たトランスジェンダーの映像が映る。  
忍、スワイプする手を止める。  
画面を拡大する。王冠の形をしたボディピアスをつけている。  
画面を切り替えてシヨツピングサイトを検索する。同じボディピアスを見つけてカートに入れる。「ご注文手続きへ」をタップしようとして着信が入る。  
画面に「明子」と表示。  
忍、電話に出る。

忍「はい」  
市村明子（42）の声「もしもし、忍？ 久しぶり」

忍「久しぶり。どうしたの？」

明子の声「うん、舞の結婚式の準備進んでるかなって思ってた」

忍「準備って、なんかあったっけ」  
明子の声「服よ！ 服！ 新しく買う？ それともあたしの着物貸そうか？」

忍「いや、スーツにしようと思ってる」  
明子の声「はあ！？ いやワンピースとかでしょ普通」

忍「ワンピース……」  
明子の声「もしかしてまだスカート嫌だとか言うつもり？ アンタもう40よ？ いい年して恥ずかしくないの？ だから姪に先越されるのよ」

忍「（慌てて）そんなんじゃないけど、滅多に着ないのに一々買うのも思ってる……」  
明子の声「海の結婚式だってあるだろうし、多分これからも着る機会はあるわよ。買った」

たらあたしも借りられるし！　ね！　買い  
なよ新しいの！

忍「まあね……」

明子の声「それだね。今回旦那の会社の人も  
結構来てくれるのよ。紹介してあげるから  
さ」

忍「いや、いいよ。そんなの……」

明子の声「（深い溜息の音）アンタね、多分  
もう子供は持てないけど。そろそろ本気で  
何とかしないと」

忍、俯く。

明子の声「せめて結婚はしておかないと、こ  
のままでするの？　今はいいかもしれ  
ないけど、働けなくなったら生活保護もら  
って、孤独死だよ。わかってる！？」

忍「うん……」

明子の声「（疑うように）まさかうちの子に  
老後の面倒見てもらおうなんて考えてるわ  
けじゃないわよね」

忍「（慌てて）まさか！　ちょっと待ってよ、  
なんでそんなこと考えてるの」

明子の声「考えるでしょ普通。あのね！　子  
供がいなくて独身で、しかも貯金だって大  
金持ちみたいにあるわけじゃない。だった  
らもう生活保護は確定でしょ！　いやなら  
今のうちにちゃんとして。ワンピースは選  
んだら画像送ってね。あたしも着るんだか  
ら！　じゃあね」

忍「……うん。じゃあ」

言い終わる前に切られる電話。  
忍、溜息を吐き、蹲る。

○（回想）2年前・路上・バス停（夕）

バス停で話す恭介と忍。

恭介「じゃあ男と女どっちが好き？」

忍「どっちもあんまり」

恭介「ふっん。なんか忍らしいね」

忍「（不思議そうに）……子供なんじゃなく  
て？」

恭介「うん。てか何でそれで子供なの？」

忍「お姉ちゃんとか、そう言うから」  
恭介「（遮るように）くだらな。ほっときなよ。：：あ、バス来た」

○現在・忍のアパート（夜）

スマホを操作する忍。

カーポートに入っているボディピアスを削除する。

忍M「自分らしさ、は溢れるたびに捨てる。でも、もし私も恭介みたいに強かったら。もし東京に言っていたら、あんな風に、言えるようになっていたんだろうか。恭介は今もあんな風に言えているんだろうか」  
忍「溜息を吐いて天井を見つめる。」  
忍「年取ると、昔の事ばっか思い出す：：」

○コールセンター・執務室・研修席（朝）

新人達の前に立ち挨拶をする忍。

忍「みなさん、ご入社おめでとうございます。本日から皆さんの研修を担当させていただきます。よろしくお願いたします。」

拍手をする新人達。

忍「スケジュールを説明する。」

忍「それでは次はオリエンテーションとしてまずお互いに自己紹介をしていきましよう。お名前と、趣味や好きなものを1分程度でお話してください。名簿順にいきますね、え」と

忍「持っていたバインダーを捲り名簿を見る。」

『飯島恭介』と書かれている。

忍「（動揺しながら）：：飯島、恭介さん？」  
飯島恭介（40）、返事をして立ち上がる。

シャツにジーンズ。男性の服装。

忍「呆然と恭介を見る。」

恭介「自己紹介を始める。」  
恭介「飯島恭介といいます。今まで仕事の都

合で東京にいたんですが、今回親の介護の  
為に地元に戻ってきました。前職では……」

恭介の自己紹介が終わる。

新人達、拍手する。

忍、ハツとして名簿を見る。

忍「あ、それでは次は……」

忍、次の新人を指名する。

恭介、横目で忍を見つめる。

○路上・バス停（夕）

バス停の列に並ぶ忍。

恭介「忍！」

忍、振り向く。

笑って手を振る恭介。

忍「恭介！」

恭介「ははっ！ やっぱり気付いてた！」

忍「当たり前でしょ！ めっちゃびつくりし

た！」

恭介「お互いにね！」

忍、恭介、笑い合う。

○居酒屋・店内・カウンター（夜）

忍、恭介、飲んでいる。

忍「戻ってきたのって最近？」

恭介「うん、先月。親の介護でね」

忍「介護って、認知症とか？」

恭介「いや、骨折だけで認知症はないよ。で

も母さんも膝が悪くて父さんの面倒見れな

いから」

忍「そっか……。施設とかはもう探した？」

恭介「（溜息を吐いて）ううん。施設はいや

なんだってさ。昔の人だよ。老後は家族

が世話して看取るもんだってきかなくて」

忍「でも、恭介だって、向こうで仕事あった

でしょ」

恭介「（暗い顔で）あったけど。仕方ないよ

ね。……夢破れたって感じ」

忍「もう……女の恰好しないの？」

恭介「（苦笑して）実家だからさ。できない。

こんな田舎じゃ、普通にしていないと雇って

も貰えないし」  
忍「……そっか」

○（回想）2年前・高校・2階教室（夕）  
雑誌を見て盛り上がる忍、恭介。  
恭介「やっぱりハイヒールって言ったら赤だよね」

忍「でも、この裏だけ赤いのもかっこいいよ」  
恭介「確かに。今から買っておこうかな」

忍「東京に持って行って履くの？」

恭介「そ、向こうで買おうって思っても売切れてたら嫌じゃない」

忍「荷物増えるよ。それにまたお父さんに見つかって捨てられるかも」

恭介「（うんざりして）そうだった……。あ、本当に早く東京行きたい。それで、すっごい綺麗な女になって高いマンションで暮らしてさ。したらアンタは運転手にしてあげる」

忍「（吹き出して）バイクで？」

恭介「そ、バイクで！ だからかっこよくなってるよ！ スカウトされるかもしれないじゃん！」

笑い合う忍と恭介。

忍M「あの頃の私達は、東京に行けば自由で大人になれると思ってた。誰にも邪魔されないで、自分のしたいことをして、誰に非難されることもなく、好きなように生きられると思ってた」

○現在・居酒屋・店内・カウンター（夜）  
雑談しながら飲む忍と恭介。

忍M「でも結局はどこに行っちゃったって。いくら夢を見たって、やっぱり現実はこんなもんなんだろう」

○コールセンター・執務室・研修席（朝）  
下山、新人達の前でトークスク립トを読み上げている。緊張している。忍、端で研修席を見渡している。

恭介を見る。真剣に話を聞いている。  
下山「じゃあ、飯島さん、このスクリプトを呼んでみてください」

恭介「はい」  
恭介、スラスラとスクリプトを読む。  
新人達、感嘆の声を上げる。

下山「すごいっすね飯島さん。素晴らしいです！」

恭介、照れ臭そうに笑う。  
他の新人達、恭介に拍手を送る。

忍、微笑ましく見つめる。

背後の席から笑い声上がる。

郁美の声「ちよつと見て見て、この人やばくない？」

忍、振り向く。

顧客情報を見ながら笑う郁美と知恵。

知恵「どれどれ？ 独身実家？ やだ、子供部屋おじさんってやつ？ 45歳なら終わってるじゃん」

郁美「ねえ、しかも親は要介護だったさ、あゝもう詰んだね。あと20年もすれば孤独死じゃん」

下山、新人達、嫌そうに知恵と郁美を見る。

忍「……千葉さん、天野さん」  
知恵・郁美「（振り向いて）はい？」

忍「（厳しく）無駄な私語は慎んでください。業務中ですよ」

知恵「（怯んで）……すいません」  
郁美、不満そうに忍を睨みつける。

忍「天野さん、仰りたいことがあるなら伺います」

郁美「（舌打ちして）……ないです」  
忍「では業務に戻ってください。（振り向いて下山に）……下山さん、続けて」

下山「（嬉しそうに）はい！」

忍、研修をする下山を見つめる。

背後から聞こえる郁美と知恵の声。

郁美の声「なんなのあの男女。SVになったからっていい気になって」

知恵の声「あたし達と同期なのになんであんなに偉そうなの？」  
郁美の声「本当にそういう性癖だったらどうする？トイレとかで襲われたら」  
知恵の声「やめてよ気持ち悪い」  
忍「無表情で前を見つめる。」  
忍「（小さい声で）金積まれてもねえわ」  
恭介「横目でじつと忍を見る。」  
新人1の声「市村S V ってかっこいいね」  
新人2の声「ね、好き！」  
新人の呟きを聞いて嬉しそうに微笑む  
下山。

○同・地下喫煙室（夕）

忍1人。煙草を吸っている。

恭介、入室する。

忍「（きよとんとして）煙草吸うの？」

恭介「たまにね」

恭介、忍の横に立ち煙草に火を点ける。

恭介「さつきはありがと」

忍「：：別に。そういうんじゃない。あの人

達も恭介のこと言っただんじやないと思うよ」

恭介「知ってるけど、でもかっこよかつた」

忍、照れ臭そうにそっぽを向く。

思わす笑う恭介。

恭介「：：やっぱり忍は可愛いよりカッコい

いが似合う。忍らしいもん」

忍「：：そ」

恭介「（笑って）いつまで照れてんの」

恭介、笑いながら忍の頭をぼんぼんと

叩く。

忍、照れながら恭介の手を外す。

恭介の腕に湿布が貼られていることに

気付く。

忍「これどうしたの」

恭介「（苦笑して）ああ。：：ううん。なん

でもない」

忍、怪訝な顔をして口を開く。

下山、入室する。

下山「お疲れ様です！ 飯島さんも煙草吸う

「んですね！」

恭介「お疲れ様です」

下山「飯島さん、今日のOJTすごかったっ

すね。既存より上手くてびっくりです！」

恭介「（落ち着いた成人男性のよう）いや

いや、下山さんのご指導のおかげです」

下山「いやいやいや、俺なんか今回初めての

研修参加でめっちゃ緊張しちゃって！ 飯

島さんの足元にも及ばないっすよ！ 前も

こういった仕事されてたんですか？」

恭介、下山、楽しそうに話す。

煙草を吸いながら2人を見つめる忍。

忍M「……こうやって、昔の望みや違和感を

1個ずつ捨てていって、そうしてみんな年

を取るのかな」

○百貨店・アパレルショップ内（夕）

シヨッピングを楽しむ人々。

無感情にワンピースを選ぶ忍。店員に

試着を勧められる。断る。

忍、スマホを確認。

画面にはワンピースの画像と、「こん

なの！」という明子のメッセージ。

似たワンピースを見つけ会計をする。

○同・通路（夕）

店員に見送られて店を出る忍。

疲れた顔でエレベーターまで歩く。

シヨ―ウインドウに飾られた赤いハイ

ヒールを見つける。

○（回想）2年前・高校・2階教室（夕）

席に座り雑誌を見て盛り上がる忍、恭

介。

恭介「やっぱハイヒールって言ったら赤だ

よね」

○（回想）居酒屋・店内・カウンター（夜）

忍、恭介、飲んでる。

恭介「（諦めた顔で笑う）実家だからさ。で

きない」

○現在・百貨店・通路（夕）

シヨールウィンドウ前に屈んでハイヒールを凝視する忍。  
Lサイズのタグが見える。

忍「（残念そうに）サイズがないか……」

溜息を吐いて立ち上がる忍。  
目の前に同色の口紅が陳列されている

ことに気付く。

忍「……」

忍、口紅を手取る。

○コールセンター・執務室・端の席（朝）

忍、郁美の横に立つ。指導中。

郁美、膨れっ面で聞いている。

忍「F A Qのここに処理方法が書いてあるの  
でこの通りにやってください」

郁美「（わざとらしく）はいはいはい、ああ  
そうですか」

忍「（無表情）……」

翔子、顔を歪めて様子を見ている。

山本、自席から忍を呼ぶ。

山本「市村さん、ちょっと」  
忍「（振り向いて）はい」

忍、山本の席へ行く。

郁美、忍と山本の様子を窺っている。

翔子、郁美の後ろを通りながら呟く。

翔子「（聞こえるように）とうとう言われる  
かしら。まあ、目に余るもんね」

郁美、動揺して翔子を見る。

翔子、郁美を一瞥してその場を離れる。  
翔子「（小声で）ビビるくらいならやるなっ  
つーの」

郁美、不安そうに翔子の背を見つめる。

○同・同・管理者席（朝）

忍、山本の席の前に立つ。

山本「無事全員デビューしたね。お疲れ様で

「す」  
忍「下山さんのおかげでスキル差もそれほど  
開かずスムーズに進められました」  
下山、席で嬉しそうに頭を搔く。  
翔子、椰揄うように下山を肘でつつく。  
山本「丁度よく終わってよかったですよ。実は次  
の定例会、一緒にクライアント前に出て貰  
おうと思ってる」  
忍「定例会、ですか」  
山本「オンラインだからあんまり構えなくて  
いいよ。それで、今回の研修の報告用に資  
料を作っておいてほしいんだ。完成したら  
プレゼンの練習もしてみよう」  
忍「嬉しそうに」：：「はい！」  
澤下、忍の背後から近付く。  
澤下「山本さん、次の定例会なら自分が出席  
したいんですけど、いいですか」  
山本「澤下さんが？」  
澤下「（忍を鼻で嗤いながら）やっぱり男が  
出た方が締まると思うんですけどね。クライ  
アントも安心感を得やすいと思います。自  
分であればわかりやすいようにデータ化も  
できますし」  
忍、表情を変えず目を伏せるだけ。  
下山、我慢できず立ち上がる。  
翔子、下山を制止する。  
山本「（にこりとして）なら研修カリキュラ  
ムそれぞれに対する今回の新人さん達の習  
熟状況について説明できる？」  
澤下「（動揺して）え、いや。それはいらな  
いんじゃない」  
山本「クライアントが欲しいのは新人それぞ  
れの経験値やスキル差。それから順番や各  
項目の厚さだよ。今回の研修は本当にスム  
ズに皆業務を習得できたからね。向こう様  
の新人研修のスケジュールを組み立てるの  
にぜひ参考にさせてもらいたいって話なん  
だ」

澤下「（不満そうに）……じゃあいいです」

澤下、足音荒く自席に戻る。

忍、澤下の背を目で追うと恭介と目が合う。

恭介、小さくガッツポーズする。

忍、小さく笑う。

○居酒屋・店内・カウンター（夜）

忍、恭介、乾杯する。

忍「デビューと初給料日おめでとう」

恭介「ありがと！ とりあえずこれで定期的

な収入は確保できるから一安心かな」

忍「お父さんの容態は？」

恭介「（苦笑して）相変わらず元気。怪我人

なんだから少しは大人しくなればいいのに。

動かないくせに口だけはうるさいんだよね」

忍「（嫌そうに）昔人ってそうだね。でもそ

んなこと言ってるであと何年かしたら私達も

あんな風になるのかな」

恭介「（小さい声で、真剣に）いや、ならな

い。あんな風には絶対ならない」

忍「……」

○（回想）22年前・路上・バス停（夕）

ベンチに座る恭介。頬が腫れて唇から

血が出ている。

忍「ここにいた、恭介」

忍、恭介に駆け寄る。恭介の顔を心配

そうに覗き込む。

忍「やっぱり今日はバイト無理だって。店長

だって無理って言うと思う」

恭介「……でも行く。帰りたくないから」

忍「恭介……」

恭介「（呟くように）……ハイヒール、捨て

られたの。隠してたんだけど、部屋の中漁

って見つけたみたい」

スラックスを握る恭介の手が震える。

忍、顔を歪めて恭介の手を握る。

恭介「治せて何？ あたし病気じゃないん

だけ。叩けば言う事聞いて治ると思っ

て

んだよ。ほんと最低。……大人になっても、あんな風には絶対ならない（語気強く）」

○現在・居酒屋・店内・カウンタ―（夜）

忍、バツクからブランドのショッパ―を取り出す。

忍「これ、デビュー祝い」

恭介、ショッパ―を受け取る。

恭介「嘘でしょ。これめっちゃ高いやつ！」

忍「似合うと思つて」

恭介、ショッパ―を開ける。

中に赤い口紅。手に持つて沈黙する。

忍「（窺うように）……ごめん、迷惑だつた？」

恭介、俯く。

忍「恭介……？」

忍、恐る恐る恭介の顔を覗き込む。

涙目の恭介。手の甲で口を押えている。

恭介「……ううん、嬉しくて。なんか、久しぶりに自分になれた気がする」

忍、ほっとして微笑む。

忍「よかった」

恭介「ねえ、この後カラオケ行かない！？

これ付けたい！」

忍「いいね」

○カラオケ・個室（夜）

他の客の歌声が響く。

恭介、手鏡を見て真剣に口紅を塗る。

忍、微笑みながら恭介を見つめる。

忍「……ハイヒールもここで履いたね。スカ

ートも」

恭介「（笑つて）店員さんが来て誤解された

こともあつたっけ」

忍「（吹き出して）あつたあつた」

恭介、鏡を閉じる。

恭介「どう？」

恭介、パツと忍を見る。

忍「似合う！ やっぱり恭介は赤が似合うね。

流石私だよ」

恭介「（笑って）アンタじゃなくてあたしを見なさいよ！」

笑い合う恭介と忍。

恭介「（はにかみながら）……ありがと、忍」  
忍「どういたしまして」

○忍のアパート（夜）

忍、帰宅。部屋の明かりを点ける。  
クローゼットの前に掛けられたワンピース。床には置きっぱなしのハイヒール。ネットクレス。バック。  
忍、一瞥してベットに横になる。天井をぼんやり見つめる。  
忍M「……私が最後になれたのは、いっただろう」

○（回想）2年前・高校・購買

購買窓口に立つ忍。そわそわしている。

購買員「段ボールから商品を探す。

購買員「スラックス、スラックス……ああ、あったあった」

購買員「はい、お待たせ」

忍「……ありがとうございます」

忍、スラックスを受け取る。嬉しそうに両手で抱えて走り出す。嬉しそうに笑って待つ恭介。

○現在・忍のアパート（夜）

忍、眉を寄せて目を閉じる。俯せになる。

○コールセンター・執務室・管理者席

パソコンに向かい仕事をする忍。

山本、忍に近づく。

山本「昨日のプレゼン大好評だね。クライアントのお礼のメール見た？」

忍「（嬉しそうに）あ、見ました。ありがとうございます」

山本「顔も覚えて貰えたし、よかったね」

忍「はい」

山本、席に戻る。

下山、翔子、向かいの机から身を乗り出して忍に声をかける。

下山「市村さん、おめでとうございます！」

翔子「おめでとうございます！」

忍「（照れ臭そうに）ありがとうございます」

忍の背後を通り過ぎる澤下。忌々し気に忍を見る。

下山、翔子、澤下を無言で凝視する。

澤下、視線に気づきバツが悪そうに立ち去る。

下山「（知らない振りです）そういう市村さん

って明日から有給でしたよね。どっか行くんですか」

忍「ああ、姪の結婚式」

翔子「先越されたんですね」

忍「（苦笑して）うるせう」

翔子「（胸を張って）大丈夫、私ですよ」

下山「それって全然嬉しくないっすよ」

翔子「どういう意味よ！」

忍、翔子、下山、笑い合う。

○同・端の席

澤下、知恵に近づく。

澤下「千葉さん、ちよっといい？」

知恵「はい？」

澤下、知恵、郁美、コソコソ話し合う。恭介、怪訝な顔で澤下を見つめる。

○同・女子トイレ（夕）

鏡の前で女性社員達が雑談中。

忍、個室から出てくる。

女性社員達、忍を見て驚く。逃げるように出て行く。

忍、首を傾げる。

知恵、入ってくる。

忍「お疲れ様です」

知恵「お疲れ様です」

忍「お疲れ様です」

忍、手を洗う。ハンカチで拭く。

知恵「あ、あの、市村さん」

忍「（驚きながら）どうしました？」

知恵「あのね、ずっと聞きたかったんだけど、市村さんってぶっちゃけトランスジェンダ、

「だよね？」

忍「は……？」

知恵「（笑いながら）だって服とか、なんか

やっぱり違うじゃん。みんなと。女の子ら

しくないっていうか。だからそうなのかな

「って」

忍「……何言ってるんですか」

知恵「あ！大丈夫だよ！あたしそういう

偏見ないし！だから本当の所教えて欲しい

くって！トイレだってさ、やっぱり女子

と同じ所使うの抵抗あるんでしょ？」

忍、知恵が掴む服の袖を見つめる。

○（回想）22年前・忍の実家（夕）

玄関に立つ忍。スラックスを抱える。

忍の母「なにこれ！またこなくならない

ものにお金使ってる！」

忍「（狼狽えながら）違う、これ履きたくて

……」

明子（20）、忍の母の背後からスラ

ックスを覗き込む。

明子「また漫画とかの影響じゃない？男っ

ぽい恰好とかさ、コスプレっていうの？」

忍「（俯いて小声で）違う……」

忍の母「アンタもう高校生なのよ！いつま

でも子どもみたいなことしてないで大人に

なりなさい！」

明子「そんなの買うお金あったらスカート買

いなよ。卒業したらちゃんとした服が必要

なんだよ？」

忍の母「明子の言う通りよ！これまだ返品

できるの！？できるならしてきなさい！」

明子「（笑って）そんな履いてたら周り

にオナベ扱いされるよアンタ！」

忍の母、明子、大声で笑う。  
忍、俯いて沈黙する。スラックスの袋  
を強く握りしめる。

○現在・コールセンター・女子トイレ（夕）

忍「やめてください」

知恵「（怯みながらも）隠さなくっても大丈夫

夫だよ、ただ力になりたいだけなの、ほら。

あたし達同期じゃん」

忍「（嫌そうな顔で）いい加減にしてもらえ

ますか。非常識ですよ」

知恵「え、でも」

忍「信じられない」

忍、出て行く。

○同・廊下（夕）

足早に歩く忍。

翔子「市村さん！」

忍「坂井さん、背後から忍に声をかける。

翔子「（小声で）くっそばあ」

忍「何かあったの？」

翔子「（小声で）くっそばあ」

忍「何かあったの？」

翔子「（小声で）くっそばあ」

忍「何かあったの？」

翔子「（小声で）くっそばあ」

忍「何かあったの？」

翔子「意見箱あるじゃないですか。澤下さん

が管理してるアレ」

忍「ああ、ワークスケジュールにリンク貼っ

てるあれ？」

翔子「そこにクソみたいな意見が入ってる」

忍「意見……？」

○同・面談室（夕）

机を挟み対面で座る忍と山本。

忍の傍に立つ下山と翔子。

山本「これなんだけど」

山本、一枚の紙を忍に差し出す。

忍、手にとって書面を見る。

以下、意見書の文字  
『投稿者・匿名。市村S Vはトランス  
ジェンダーです。女子トイレを使用さ  
れるのは怖いです』  
『投稿者・匿名。若いOPにだけ優し  
くて気持ち悪いです。言い寄られたり  
襲われたりしたらと思うと不安です』

下山「：：澤下さんなら投稿者のアカウント

も調べられるはずなんですけど教えてくれ  
なくて」

翔子「でも絶対千葉さんと天野さんです。意  
見箱の入力ホーム見ながら笑ってたって他  
のOPから聞いてますから」

山本「（困ったように）でも証拠がないから  
ね：：」

下山、翔子、顔を歪める。

山本、申し訳なさそうに忍を見る。

山本「ごめん市村さん、本当にこんなこと聞  
きたくはないんだけど、一応聞かせてね」

忍、俯いて書面を見つめたまま。

山本「：：これは、特定の個人に対するまっ  
たく謂れない誹謗中傷ってことであって  
るね？ つまり、市村さんはトランスジェ  
ンダーではないってことで」

忍、ハツと顔を上げる。山本を見る。

○（回想）忍のアパート（夜）

明子の声「アンタもう40よ？ いい年して  
恥ずかしくないの？」

○（回想）コールセンター・女子トイレ（夕）

知恵「（笑いながら）だって服とか、なんか  
やっぱり違うじゃん。みんなと。女の子ら  
しくないっていうか」

○（回想）2年前・忍の実家（夕）

明子「（笑って）周りにオナベ扱いされるよ  
アンタ！」

忍の母、明子、大声で笑う。  
忍、俯いて沈黙する。スラックスの袋  
を強く握りしめる。

○現在・コールセンター・面談室（夕）

忍、震え出す。

忍「わた、わたし：：わたしは」

明子と母の笑い声が響く。

忍、歯を食いしばって俯く。

忍「：：わたし」

忍、涙が零れる。

翔子「（心配そうに）市村さん：：！」

下山「市村さん！」

翔子、下山、忍に手を伸ばす。

山本「ごめん、市村さん、あの」

忍、立ち上がる。面談室を飛び出す。

山本「市村さん！」

○路上・バス停（夕）

雨が降っている。

恭介、バスを待っている。

びしょ濡れで走る忍。恭介の後ろを通  
り過ぎる。

恭介「ちよっと！ 忍！？」

恭介、忍を追いかける。

雨の中走る忍と恭介。

× ×

恭介、忍の腕を掴む。

恭介「忍！」

忍、恭介に気付く。

恭介「（息を切らして）：：なにがあつたの、

アంత」

忍、呆然と恭介を見る。

忍「（息を切らして）：：恭介」

忍、大声で泣き出す。

○公園・東屋（夜）

雨が降っている。

ベンチに座る忍と恭介。

恭介「意見箱に？」

忍「俯いて頷く。」

恭介「でも誰も信じてないんですよ。だから

グルーブマネージャーだってそういう言い

方をしたんじゃないの？」

恭介「忍の顔を覗き見る。」

忍「（叫ぶように）でも答えられなかった！」

忍「トランスジェンダーだったらセクハラし

たことになるの！？ トランスジェンダーし

じやなかったら無罪になるの！？」

恭介「忍、そうじゃなくてグルーブマネー

ジャーが聞きたかったのは……」

忍「わかつてる！ わかつてるよ！ ただの

誹謗中傷で収めたかっただけだつて！

も、じゃあ私は！？ 自分でもわからない

のにわかつたふりして嘘つかないけな

い私の気持ちは！？」

恭介「忍……」

忍「男か女かなんてわからないよ！ わから

ないのに、決めたくないの！ 決めない

といつも言われる！ いい年して恥ずかしい

ベだつて！ 女の子らしくないつて！ オナ

ベだつて！

（フラッシュバック）

忍の母、明子、大声で笑う。

忍、俯いて沈黙する。

忍、強く握りしめる。

× × ×

忍「なんで決めなきゃいけないの！ なんで

選ばなきゃいけないの！？ 女も男も好き

じやない！ 女にも男にもなりたくない！

その2つしかないの！？」

恭介、無言で忍の背を抱く。

忍「説明すればいいの！？ トランスジェン

ダーじゃないです、女みたいなのが恰好しなく

ないだけで癖に！？ なんてイエスカノー

んかしかない癖に！？ なんてイエスカノー

か選べないの！？　なんで選べないと説明  
をしなくちゃいけないの！？　どうせ  
聞く気もない癖に説明なんて求めないでよ  
……！

忍、声をあげて泣く。

恭介、忍の背を抱く手に力を籠める。

悲しそうに俯く。

× × ×

雨が止む。

電車の踏切の音が響く。

ベンチに座る忍と恭介。

恭介、忍の背を抱いたまま。

恭介「……落ち着いた？」

忍、小さく頷く。

恭介「（苦笑して）我慢強いと思ってたけど、  
アンタ本当に溜め込むわよね」

恭介、忍の頭をぽんぽんと叩く。

忍、バツが悪そうに俯く。

その姿を見て小さく笑う恭介。

しばらく沈黙。

恭介「……さっきさ、アンタ、なんで、な  
んでって言うてたわよね」

忍、恭介を見る。

恭介「なんで好きなものを着ちゃいけない  
の？　なんで男か女か選ばなきゃいけない  
の？　……」

忍、頷く。

恭介「（遠くを見つめたまま）なんでかな。  
なんでかはあたしもわかんない。なんで好  
きなものを着ちゃいけないのか、なんで好  
ズとかホモとかトランスジェンダーとか、

名前つけられなくちゃいけないのか、なん  
で放つといってくれないのか」

忍、悲しそうに俯く。

恭介、忍の頭をぽんぽんと叩く。

恭介「……でもそれは、アンタが悪いから  
やない。わかる？　アンタが何かしたから  
周りがそうなんじゃない。アンタが悪いか  
ら周りがそうなんじゃない。普通の女みたい

忍「……でも生きられない。普通の女みたい

に、生きられない」  
恭介「それはあなたが悪いの？」  
忍「：私が、おかしいから。男も女も決められないから。せめて決められたら、普通の人みたいにならば、女の子と結婚したいって思

えるようになったら、男の人と結婚したいって思

え。恭介、泣きそうに顔を忍を抱きしめる。

恭介「ねえ、なんでそれが悪いの。なんであなたが悪いの。女の子が欲しい物欲しがらなきやいなけないのはなんで？ 着たくないもの着なきやいけなさいの？ 普通の女みたいになきやいけなさいの？ 好きでもないものを好きにならなきやいけなでもないの？ 嫌なもの嫌でしよ、仕方ないでしよ、それが、あなたが、嫌でしよ」

忍、再び泣き出す。

恭介「わかる？ それが、あなたがなの。レズとかホモとかオカマとかオナベとか関係ない。あなたがあなたに変な名前つけてどうするの？ あなたが変な名付けの中にわざわざ収まってやってどうするの。あなたは、あなたが、あなたでしよ」

恭介、忍の背を優しく撫でる。

恭介「おかしなことなんてないわよ、なにも。あなたはあなたなんだから」

### ○百貨店・アパレルショップ内（夜）

恭介、忍、手を繋ぎ歩く。

スーツを選ぶ。

店員、試着を勧める。

忍、断ろうとする。恭介、忍を強引に

フィッティングルームに押し込む。

忍、声を出して笑う。

× × ×

忍、カーテンを開く。

かっこいいスーツ姿。

恭介、店員、感嘆の声を上げ拍手する。

他の店員も集まり、皆で小物を選ぶ。

忍、照れながら笑う。

恭介、忍を優しく見つめる。

○ 結婚式・式場

壇上で微笑む新郎新婦。

盛大な拍手が響く。  
忍、フイツティングしたスーツ姿。微笑みながら壇上に拍手を送る。

○ 同・式場前廊下

明子「話をする明子と忍。」

明子「顔を歪めて」ワンピースにすればよかったのに」

忍「淡々と」これがいいから」

明子「姪の結婚式なのよ？ それでそんな恰好って。変な女って思われて終わりにやない。芸能人にもなったつもりなのアンタ」

市村舞「淡々と」そうだね」

市村舞「18」「しーちゃん！」

舞、ウエディングドレス姿で忍に駆け寄る。

忍「微笑んで」舞、おめでとう。綺麗だよ」

舞「嬉しそうに」ありがと！ しーちゃん

も素敵！ あたし絶対しーちゃんにスーツで来てほしかったの！ お母さん言ってくれたんだね、ありがとう！」

明子「バツが悪そうに」……まあね」

忍「不思議そうに」どういうこと？」

舞「しーちゃんにスーツで来るように言ってるお母さんに頼んでたの！ だってあたし、しーちゃんこの恰好が一番好きなんだもの！ カッコいいもん。自慢なの！」

忍「ぽかんとする。」

舞「ねえ、覚えてる？ 保育園の時、しーちゃんの仕事終わってから迎えに来てくれたことあったでしょ！ あの時もスーツだった！ 気分よかったですね！」

忍、吹き出す。

舞「お母さん撮って！早く！」  
舞、明子にスマホを渡す。

明子「（渋々と）はいはい」

忍、舞の頭を撫でる。

忍「舞、ありがとう。幸せにね」

舞「（満面の笑みで）うん！」

○ 恭介の家・台所（夕）

恭介、食器を洗っている。

忍からLINE。

画面には忍と舞が微笑む結婚式の写真。

恭介、嬉しそうに微笑む。

飯島大輔（75）の声「恭介！」

驚いて食器をシンクに落とす恭介。

大輔の声「恭介はどこにいった！」

飯島節子（73）の声「あなた、落ち着いて

ください」

恭介、スマホを握り締めて台所を出る。

○ 同・両親の寝室（夕）

介護ベットの座る大輔。

節子、ベットの傍に立ち狼狽える。

大輔「なんだこれは」

大輔、忍が贈った口紅を握っている。

恭介、息を飲む。

大輔「お前またオカマの真似事なんかしてる

のか！」

節子「あなた、もう……」

ベットの下に散乱する恭介のバック。

口紅の入っていたシヨッパ。

恭介「……勝手に漁ったの、人の部屋」

大輔「黙れ！俺の家だ！住まわせてもら

ってる癖に偉そうな事を言うな！」

恭介「（小声で）好きで住んでるわけじゃな

い」

節子「（遮るように）恭介！」

大輔「こんなことが近所に知られたらどうな

るか……分かってるのか！お前は後継

ぎなんだぞ！この家の跡を継ぐんだぞ！」

恭介「（溜息を吐き）後を継ぐものなんかどこにあるの。大金持ちにでもなったつもり」

大輔「（激昂して）なんだと！」

節子「あなた、必死に大輔を宥める。りなさい！今はそんなことしてないわよね！ね！」

恭介、唇を噛んで沈黙。

大輔「東京でオカマの真似事なんかして、いない年して結婚もしない、大した仕事もしてないで！お前はこれからどうするつもりなんだ！」

恭介「父さんが介護が必要だって言うから戻ってきたんじゃないか。仕事だって辞めて

大輔「（遮って）黙れ！なんでこんなにおかしく育った！お前さえちゃんとしてれば今頃は孫の顔だっただけなのに……！」

大輔、頭を抱える。

大輔「こんなもの！」

大輔、口紅を握って大きく振り被る。

恭介、目を見開く。

○コールセンター・面談室（朝）

山本「机を挟み対面で座る忍と山本。」

山本「（頭を深く下げて）本当に！申し訳ない！市村さん！僕が浅はかでした！」

忍「（驚いて）あ、あの山本さん」

山本「（項垂れて）公平に見てるつもりで全然できてなかった。そもそも市村さんの性別は全然関係のない話なのに無理に言わせるような真似をしてしまっただけ……！」

忍「いえ、自分こそすいません、なんか動揺しちゃって……」

山本「いやいや、全然市村さんは悪くないよ！今回の件についてはまず本社のコンプライアンス担当を交えて投稿者と面談す

ることにしたよ。他人の性別を勝手に断じ  
る権利も、その性別について自由に論じる  
権利も誰にもないからね」

忍、驚く。

山本「僕もまだ勉強不足で、どうしたらいい  
かわからないことも多いし、また間違った  
対応をしそうになるかもしれないけど。お  
かしいと思っただことか、こうした方がい  
いって言うのがあつたら教えて欲しいんだ」  
忍「小さく微笑んで」……はい」

○同・執務室・管理者席（朝）

自席に着席する忍。

翔子「おはようございます！ 市村さん！」

下山「おはざーす！」

忍「（笑って）おはよう」

忍、執務室を見渡す。恭介は席にいな  
い。

下山、忍の様子に気付く。

下山「あ、飯島さん休みってさっき連絡きて  
ました」

忍「休み？」

下山「はい、風邪って。すごい鼻声でした」  
忍「そう……」

○同・地下喫煙室（夕）

煙草を吸いながらスマホを見つめる忍。  
恭介の返事はない。

下山、翔子、煙草を啣えながら入室。

下山「翔子「お疲れ様です」

忍「お疲れ様です」

下山「市村さん、そういえば姪っ子ちゃんの  
結婚式どうでした？」

忍「よかったですよ。すごい綺麗だった。なんか  
泣けちゃうよね、やっぱり」

翔子「写真撮りました？ 見たい！」

忍、翔子と下山にスマホを見せる。

ウエディングドレスの舞とスーツ姿の  
忍の写真。

翔子「うっわ。めっちゃ綺麗！素敵な花嫁さん！」  
 下山「つか、市村さんのこのスーツもめっちゃ似合いますよ！すげえカッコいい！」  
 翔子「なんかこれぞ市村さんって感じ！明日はこれ着て来てくださいよ！」  
 忍「（笑って）嫌だよ！」  
 忍、翔子、下山、笑い合う。  
 澤下、入室。  
 翔子、下山、眉を寄せる。  
 澤下、嫌な顔をして部屋の隅に行く。  
 翔子「（小声で）意見箱の管理権限をコンプラ担当に剥奪されたんですよ。公平性を期す為って」  
 忍「：：：そう」  
 下山、スマホを操作している。「あ」と声をあげて顔を上げる。  
 下山「今思い出したんですけど。姪っ子ちゃんって確か去年制服で市村さんのこと迎えに来てませんでした？」  
 忍「ああ、そうだね。アパートに泊まりに来たいって言って」  
 翔子「（思い出して）あ、あゝ！あつたあつた！下山がふざけて『市村さんに会いたければ事務所通してください』って言ったあれ！？」  
 忍「（呆れて）人の姪になんてことを」  
 下山「（笑って）いやいや、ちよつと面白くなっちゃって！でもそっかくあの子が結婚かあ」  
 忍「（懐かしそうに）この間までおんぶしてた気がするんだけどね」  
 翔子「早いですよね、子供の成長って」  
 澤下「（遮るように）くっだらねえ！」  
 忍、翔子、下山、澤下を見る。  
 澤下「自分が子供作れねえからって人の子供使って親気分かよ」  
 翔子「（ムツとして）は？何言ってるのアンタ」

澤下「LGBTQとかなんとか世間で騒がれてるからついていい気になってよ。結局は子供もつくれない、結婚もできないただの負け組の言い訳だろ。気持ちわりいんだよ」  
 下山「（激昂して）おい！お前マジで……」  
 忍、下山を片手で制す。澤下の前に立つ。  
 澤下「（怯んで）……なんだよ」  
 忍「……もういっぺん言ってみな」  
 忍、無表情。低く、威圧的に言う。  
 忍「もういっぺん言ってみろっつってんだよ」  
 澤下、動揺する。  
 忍「人のアレコレがテメエに何の関係があるって？」  
 澤下「（焦って）いや、俺は一般的な意見を言っただけで」  
 忍「誰がテメエに一般的な意見求めたよ」  
 澤下「（引き攣り笑いをしながら）いや、何マジになつてんすか？意味わかんねー」  
 忍「（被せ気味に）意味もわかんねえ奴が人の話に口出すなよ」  
 澤下「（どもりながら）……エ、SVがそんな口聞いていいんですか」  
 忍「人をクズみてえに扱う奴をクズみてえに扱って何が悪いって？」  
 忍、澤下に顔を寄せて。  
 忍「いい加減にしろよ」  
 澤下、後退る。悔しそうな顔をして逃げた。  
 忍、溜息を吐いて煙草に火を点ける。  
 下山、翔子、興奮して叫ぶ。  
 下山「うおおお！市村さん！」  
 翔子「めっちゃかっこいい！めっちゃ痺れた！惚れるー！」  
 忍「（苦笑して）揶揄うんじゃないの」  
 下山「揶揄ってないっすよ！もう一生ついていきます！」  
 忍「うわ、いらな」  
 下山「ひでえ！」

忍、翔子、下山、笑い合う。

○路上・バス停（夕）

忍、恭介にLINEする。

以下、忍の文字。

『風邪ひいたって聞いた』

『大丈夫？』

すぐに既読になる。

以下、恭介の返事。

『大丈夫』

『喉と鼻にきてるみたい。ぜんぜん話

せない』

『よくなったらまた連絡するね』

忍、『了解』と返信。

バスが来る。

○恭介の家・風呂場（夕）

明かりは点いていない。

バスタブの中に膝を折り座る恭介。

左目が腫れ、口の端が切れている。鼻

血の痕が顎にまで残る。

スマホの電源を落として膝に顔を埋め

る。手には口紅が握られている。

外から大輔の怒声と宥める節子の声が

響く。

○コールセンター・面談室（朝）

上座に山本、コンプライアンス部門担

当者が座る。

対面には澤下、千葉、天野が座る。俯

いている。

コンプライアンス部門担当者「（神妙に）千

葉さんと天野さんからは君の指示だと聞い

ているんだけど、説明できる？ 澤下君」

澤下「（歯切れ悪く）いや、俺は別にそんな

ことは」

千葉、天野、バツが悪そうに視線を逸

らす。

山本「近くにいたOPさんも、君が指示した

のを聞いたと言っていたんだけど、それに

ついではどう？」

澤下「……」

山本「澤下君？」

澤下「澤下、堪え切れず机を叩く。」

澤下「（逆切れして）いや、でも！ 市村 S

V がトランスジェンダーだってことは事実

じゃないですか！ この前も男みたいな言

い方で俺に暴言吐いてきたんですよ！ S

V の癖に部下に暴言を吐いたんです！」

山本「なら、部下は上司に暴言を吐いても許

されると？」

澤下「え」

コンプライアンス部門担当者「それについて

は他のリーダーから録音を貰ってるよ」

澤下「驚く。」

（フラッシュバック）

下山「スマホを操作している。「あ」

と声を出して顔を上げる。」

× × ×

コンプライアンス部門担当者「市村さんは事

実を認めたよ。個人的な言いがかりに對し

て個人として反論しただけ、だそうだ。そ

れによつて何らか会社からの措置があるの

であればそれは受け入れると言っている。」

……どう考えても君の暴言の方が悪質であ

るにも関わらずね」

澤下「（歯噛みする）……」

山本「それから、君はなんで市村さんが LG

B T Q だと決めつけてるの？」

澤下「（歯切れ悪く）……だってどう考えて

も」

山本「なんで考える必要があるの？」

澤下「え」

山本「市村さんの性別が君の仕事に何の関係

があるの？」

澤下「それは……」

コンプライアンス部門担当者「君達がしたこ

とはね、立派な名誉棄損です。LGBTQ

であるかどうかが論点ではない。性別はあ

くまで個人の自由だ。それを開示するもしないも個人の権利だ。なのに何故、君達はその間に当たり前のように踏み込んでいるんだ？ なぜ君達は自分の憶測に過ぎない事を、まるで事実であるかのように決めつけ、広めているんだ？」  
澤下、千葉、天野、俯く。  
コンプライアンス部門担当者「君達は、個人の名誉をいたずらに、著しく、傷付けたんだ。私達はこの会社で働く全ての社員を守る義務がある。正直これ以上、君達を雇用し続けることは難しい」  
廊下の喧騒が面談室に響く。

○同・執務室・管理者席（夕）

パソコンに向かい仕事をする忍。

恭介の席を見る。空席。

下山、向かいの机から身を乗り出す。

下山「飯島さん来ないっすね」

忍「そうだね：：」

翔子、忍に近づく。

翔子「（軍隊のように敬礼して）市村さん、

偵察終わりました」

忍「（驚いて）頼んでないね！？」

下山「お、どうだったんですか坂井さん」

翔子、にっこり笑って片手で首を切る

素振りをする。

下山「（にっこり笑って）はいはいはい」

忍「こら」

翔子、下山、笑いながら話をする。

忍、苦笑しつつ翔子と下山を見つめる。

視線を再び恭介の机に向ける。

○路上・バス停（夜）

雨が降っている。

バスを待つ忍。

着信が入る。画面には『恭介』と表示。

忍、慌てて電話に出る。

忍「恭介？」

返事はない。電話越しに雨音が聞こえ

る。

忍「恭介？　大丈夫？　恭介？」

恭介の声「……ごめ、ちよっとぼんやりして  
た」

忍「大丈夫？　まだ風邪治ってないの？」

恭介の声「……うん、ちよっとね」

忍「（心配そうに）ねえ、本当に大丈夫？」

○公園・東屋（夜）

雨が降っている。

地面に座り、ベンチに背を預ける恭介。  
脇腹を押さえている。血が流れている。

恭介「（小さな声で）……ねえ、あたし、仕  
事辞めようと思ってる」

忍の声「何、どうしたの？」

恭介「……やっぱり、介護と仕事の両立って  
大変だし、さ」

忍の声「（残念そうに）そっか……。で、で  
もシヨートタイムだっただって選べるよ。いや、

まず風邪を治すのが先でしょ。その後で話  
そうよ」

恭介「小さく首を振る。

恭介「もう、ここにはいないと思う。……親  
も、他の人を頼ると思うし」

忍、恭介、しばし沈黙。

電車の踏切の音が響く。

忍の声「（悲しそうに）……もう1回、東京  
行く？」

恭介「（小さく吹き出して）東京？　行かな  
いわよ、もう」

忍の声「行かないの……？」

恭介、遠くを見つめる。

恭介「……東京に、行ったら、自由になれる  
と思ってた。同じ様な人に出会えて、変な  
目で見られなくなってる、自分で自分の事、  
おかしくないって。自信持って言えるよう  
になるって思ってた」  
恭介、脇腹を押さえる手を外し、手の  
平を見つめる。血がべつとりついてい  
る。握りしめる。

恭介「でも、全然だめだった。どこに行ったって何にも変わらない。変な目で見られるのは変わらない。：：あの時アンタに言った言葉はね。本当はあたしが言って欲しかった言葉だった」

○（回想）同・同（夜）

恭介「：：でもそれは、アンタが悪いかからじゃない。わかる？ アンタが何かしたから周りがそうなんじゃない。アンタが悪いから周りがそうなんじゃないのよ」

○（現在）同・同（夜）

恭介、自嘲する。

恭介「本当は、帰ってくるのも嫌だった。：：でもアンタが居たところだから。アンタと、居たところだから。アンタの隣だった。強気でいられたから。だから、もしまたアンタに会えたら、昔みたいに強くなれるかなって思ってた」

忍の声「：：恭介」

恭介「（小さく噴き出して）そしたら本当に会えるんだもの。本当に、また昔みたいに強くなれた気がして、：：嬉しかった」

忍の声「：：っ」

恭介「それで、思ったの。どこに行っても変わらないって。どこに行っても、行かなくても。結局、弱くなるかも強くなるかも、自分で決めるしかないのよ」

忍、無言。

恭介「：：卒業式に言ったこと、覚えてる？ アンタ自分のこと、勇気ないって言ったの」

○（回想）2年前・高校・2階教室

忍、恭介、窓枠に肘をつき、外を眺める。

恭介「東京きたら？ そうしたら仕事だっていっぱいあるし、好きな恰好もいっぱいできるよ」

忍「……（首を振って）そんな勇気ない」

恭介、肩を竦める。

恭介「勇気ないってわけじゃないと思うけどね。バイトしてスラックスだって買ったじ

やん」

忍「うん……」

恭介「忍はさ、多分、勇気がないんじゃないかって」

恭介、忍の頭に手を置く。

忍、恭介を見上げる。

恭介「まだその時じゃないんだよ」

○現在・路上・バス停（夜）

忍、遠くを見つめる。

恭介の声「でも、もういいんじゃない？」

忍「……いいって」

恭介の声「アンタ、この間、『なんで』って言ってたじゃない。『なんで』『なんで』って」

忍、俯く。

恭介の声「それがアンタなの。その沢山の『なんで』が、クエスチョンが、アンタなの。アンタ自身なの」

忍、目を見開く。

恭介の声「……だから、ねえ。置いてけぼりにしないで。大事にして、アンタ自身を。ちやんと拾ってあげて。アンタが捨ててるのは、見ないようにしてる『なんで』は、全部アンタ自身なのよ」

忍、齒を食いしぼる。

恭介の声「だから、今が、勇気を出すときなんじゃない？ アンタの周りに向けて勇気を出すんじゃない？ アンタはアンタの為に、勇気を出す時なのよ。置いてけぼりにしてるアンタを、拾って、守るために」

忍、俯く。嗚咽を漏らす。

恭介の声「……それだけは、言っとかないと思つて」

恭介、激しく咳き込む。

忍「……恭介？」

返事はない。  
スマホからは雨の音だけが聞こえる。  
忍「恭介！？　どうしたの！　ねえ、今どこにいるの、ねえ！」

○公園・東屋（夜）

恭介、倒れる。表情は虚ろ。  
スマホから忍の呼び声が響く。  
雨が降り続ける。

○路上・バス停（夜）

忍、必死に呼びかける。  
返事はない。  
忍、前を向き、走り出す。

○恭介の家・玄関前（夜）

忍、荒く息をしながら駆けつける。  
家の前に停車するパトカーと人だかり。  
人が揉めているような声が辺りに響く。  
忍、野次馬を押しつけて家に近づく。  
大輔「はなせ！　はなせえ！」  
大輔、複数の警察官に押さえられている。

節子「泣きながら」主人が刺したんです！  
やめてって言ったのに！　止めたのに！  
大輔「あいつが悪いんだ！　あいつがおかしいから！　あいつが！」  
大輔、暴れ続ける。

警察官達、必死に抑える。

近所の住民1「（小声で）何があつたの？」  
近所の住民2「（小声で）息子さんを刺したってさつき……」  
忍、愕然とする。

大輔「（泣き叫びながら）俺は父親だぞ！　俺は悪くない！　あいつがおかしいの！　俺は悪くない！　あいつがおかしいの！　俺は悪くない！　あいつがおかしいの！」  
節子「もうやめて……！　もうやめて……！　もうやめて……！」

節子、両手で顔を覆う。泣き崩れる。

忍、スマホを見る。

電話をかける。繋がらず切断。

また電話をかける。繋がらず切断。

忍、震え出す。歯を食いしばる。

忍 「( 呟くように) 恭介、恭介、恭介……」

電話をかける。繋がらず切断。

電話をかける。繋がらず切断。

忍、スマホに額を付けて泣き出す。

忍 「恭介……どこ……！」

背後からパトカーのサイレンが響く。

忍、ぼんやりと振り向く。

応援のパトカーが近付いてくる。

忍、パトカーを凝視する。

○回想・同・同(夜)

雨が降っている。地面に座り、ベンチに背を預ける恭介。

恭介「もう、ここにはいないと思う。……親

も、他の人を頼ると思うし」

忍、恭介、しばし沈黙。  
電車の踏切の音が響く。

○現在・恭介の家・玄関前(夜)

忍、目を見開く。人混みを掻き分けて走り出す。

○路上(夜)

走る忍。目の前に公園の入り口。

○公園・東屋(夜)

ベンチ前に倒れる恭介。

忍、恭介に駆け寄る。

忍 「恭介！」

忍、恭介に呼びかける。顔を覗き込む。

恭介、浅く息をしている。

忍、電話で救急車を呼ぶ。

恭介、ぼんやりと瞳を開く。

泣き叫ぶように電話する忍。恭介の脇腹を押さえている。

恭介「……しのぶ」  
忍「（気付いて）恭介！ 恭介！ しっかりして！」  
恭介「……見つけて、くれたの」  
忍「当たり前でしょ！」  
恭介「腕を動かす。脇腹を押さえている。忍の手に自分の手を添える。」  
恭介「（笑って）アンタ、前もこうやって見つけてくれたこと、あつたわよね……」  
忍「恭介、力なく咳き込む。呼吸が荒い。」  
忍「恭介、大丈夫だよ、大丈夫。今救急車くるから……！」  
恭介「悲し気に笑う。小さく首を振る。」  
忍「お願い、がんばって……！ がんばって恭介……！」  
恭介「（掠れた声で）……死にたくない、でも、もう生きるのも、しんどい」  
忍「恭介……！」  
恭介「（自嘲して）……あれだけアンタに偉そうなこと言っただけにね」  
忍「強く首を振る。」  
恭介「ぼんやりと空を見つめる。」  
雨は止んでいる。  
恭介「……なんで、性別を選ぶだけのことが、親を捨てることになるのかしら。なんで、親を取ることが、自分を捨てることになるのかしら、なんで、自分が望むように、生きていきたいのかしら」  
恭介「悲し気に微笑む。」  
恭介「……なんで、あたし達は、周りにおかしら……」  
忍「恭介の胸に額を付ける。嗚咽を漏らす。」  
恭介「ねえ、この『なんで』も、アンタの中に追加して……」  
忍「恭介……」  
恭介「あたしの、『なんで』も、アンタに預ける。アンタが、置いてけぼりになんてで

きないように」

忍「：：っ」

恭介「そうしたら、きっと――」

恭介、虚ろな瞳。動かない。

忍、慌てて顔を上げる。

忍「恭介！ 恭介！ 恭介！？」

救急車のサイレンが響く。

忍、何度も恭介に呼びかける。

救急隊員が駆け付ける。

忍、救急隊員に抑えられ、下がる。

忍の手に重なった恭介の手が離れる。

蘇生措置が施される。

恭介、動かない。

忍、叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ。

○（回想）22年前・駅・改札前

恭介、忍、並んで歩く。それぞれポストンバックを持っている。

恭介「ここでいいわ。荷物ありがと」

恭介、忍の肩からポストンバックを下ろす。

忍「気を付けてね、なんかあったら：：」

忍、言いかけて俯く。

恭介、苦笑して忍の顔を覗き込む。

恭介「連絡して、とは言わないんだ」

忍「（寂しそうに）：：だつて。折角、心機

一転できるんだし。こつちのことなんて、

いい思い出無いじゃん」

恭介「（はつきりと）まあね！」

忍、「もうっ」と膨れっ面をする。

恭介、声を上げて笑う。

恭介「でもアンタのことは忘れない。あたし

の一等の親友だしね」

忍「（寂しそうに）：：うん」

駅のアナウンスが流れる。

しばらく見つめ合う忍と恭介。

恭介「：：ねえ、忍。今つて、男か女かオカ

マかオナベしかないよね」

忍「（きよんとしとして）うん、そうだね」

恭介「でも、これからもっと増えたりして。

どんな種類が出てくるのかわかんないけど。でも、もしかしたら人の数だけ増えて、誰も覚えきれなくなつて。誰も覚えなくなつて。……それで、それが、当たり前になれば、いいね」

忍 「そうだね……」

恭介、忍、手を握る。しばらくそのま  
ま動かない。

2人を避けて行き交う人々。

恭介 「……じゃあ、行つてくる」

忍 「うん、いつてらつしやい」

手が離れる。

改札へ向かう恭介。  
後ろ姿を見つめる忍。

○現在・同・同

行き交う人、人、人。

改札を見つめる忍。ライダーズジャケットを着て、王冠の形のボディピアスをつけている。

下山 「あ！ いた！ 市村さん！」

忍、振り向く。

翔子 「間に合つた！」

下山 「会社から意外と距離あるんですね……」

翔子 「だからタクシー拾おうつて言ったのに！」

忍 「見送りなんていいのに」

下山 「いやいやいや、来るに決まつてんじやないですか！ 我らが市村さんの海外進出ですよ！」

忍 「（苦笑して）海外進出……」

翔子 「そうですよ！ ちなみに山本さんはあちらです」

翔子、駅入り口を指さす。

壁に寄りかかつて荒く息をする山本。

忍、翔子、下山、笑う。

× × ×  
駅のアナウンスが流れる。

下山「いいですよ〜！ タイ！ 俺も行きたい！」

翔子「（引いた顔で）何、ダジャレ？」  
下山「ちよ！ 違いますよ！？」

忍、翔子と下山を見て微笑む。

山本「仕事はもう決まってるの？」

忍「いいえ、なんにも。でもいいんです。全部これからですし。決めなかったら決める

し決めたくなかったら決めないし」

山本「（笑って）……なんか、市村さんらしいねえ」  
忍、きよとんとする。

○（回想）2年前・路上・バス停（夕）

並んで話をする恭介と忍。

恭介「ふ〜ん。なんか忍らしいね」

○現在・駅・改札前

忍、ふふ、と笑う。

忍「でしよう？」

下山、翔子、山本、微笑む。

× × ×

改札前で手を振る下山、翔子、山本。

手を振り返す忍。

前を向き、人混みの中に消えていく。

○電車内

流れる景色を見つめる忍。

向かいに座り新聞を読むサラリーマン。

忍、新聞の記事が目に入る。

『無理心中。息子死亡。トランスジェンダー認められず』と書かれた見出し。

忍「…」

忍、悲しそうに眼を伏せる。片手でジャケットの胸ポケットを押さえる。

電車が進んでいく。

景色が通り過ぎていく。

忍M「心に湧き出る『なんで』を、ずっと捨ててきた。そうしなきゃ駄目なんだと思ってた。

た。そうしなきゃ駄目なんだと思ってたか

ら。でも完全に捨てて前に進むこともできなく。何度も捨てて、でも結局は捨てきれなくて、たまに引っぱりだして抱きしめて。誰かに何か言われるたびにまた捨てて」

○飛行機内・通路

自分の座席を探す忍。

窓側に座る。

外は晴れ。

忍M「私達が、私達のままで生きるには覚悟が必要だった。私達のままでいる為には覚悟が必要だった。周りに理解してもらおう。勇気と覚悟。それが絶対に必要だと思っ

○同・座席

フライト中。

窓の外を眺める忍。

太陽の光が差し込む。

忍、胸ポケットから口紅を取り出す。

恭介にあげた口紅。ひび割れて、形が

ひしゃげている。

忍M「でも違った。本当に必要だったのは」

忍、口紅を光に翳す。

○回想・公園・東屋（夜）

忍、恭介の胸に額を付ける。

恭介「あたしの、『なんで』も、あなたに預

ける。あなたが、置いてけぼりになんてで

きなないように」

忍「……っ」

恭介「そうしたら、きつとー」

○現在・飛行機内・座席

忍、口紅を握り締め、胸に当てる。

忍「置いていけないね。もう二度と。……恭

介も、私も、置いていかないよ」

忍、顔を上げる。真っ直ぐ空を見る。

忍「じゃあ、行こうか」

忍の頬を涙が伝う。  
飛行機が飛んでいく。  
雲の上。果てのない空。

了

【参考文献】

クエスチョニングとは

<https://elementist.com/article/2767>